言語学論叢第15・16号（1997）

ホメーロス・ギリシア語における語根アオリストの用例と印欧語理論に基づくその解析

吉田育馬

Ⅰ．語根アオリストとは？

語根アオリストとは、印欧祖語ならびに印欧祖語の形態論的構造を継承している諸言語（以下「印欧語」という）において印欧祖語の幹母音（thematic vowel）*-e/o- を介さずに語根または語基（純粋な語根に拡張子としての喉音 -H_x- を添加してできたもの、たとえば *-ĝen-H_1-「生む」、*wel-H_x-「望む」等）に直接語尾をくっつけてできた瞬間相としての過去形のことである。このアオリストが残ったのは、インド・イラン語派の古代語（サンスクリット語、アヴェスタ語、古代ペルシア語）と古代ギリシア語のみであって、Robert S. P. Beekes（1995, 235頁）によればアルメニア語にも残っているというが、アルメニア語自身は幹母音 -*e/o- を失った言語なので（ギリシア語 ἔλιπε [aor.sg.3]「残した、立ち去った」< IE *é-li-k^w-e-t に対するアルメニア語 elikʿ を参照）、幹母音型アオリストに明瞭に区別される形での語根アオリストが残っているわけではない。また、アオリストという独自の時制としては存在しないが、アナトリア語派の諸言語の mi- 動詞の過去形は、基本的に語根アオリストだと考えてよい。アナトリア語派では時制は現在と過去しかなく、過去形はギリシア語やインド・イラン語派と同じアプラウトを行うからである。

この語根アオリストは、mi- 動詞と同じく、通常は、能動単数 e 階梯：その他（双・複数、中動態）ø 階梯の交代を行ったとされており、これはガーサー・アヴェスタ語の yaugt [sg.3] : yujan [pl.3]「軛に繋いだ」< IE *yéug-t : *yug-ént, etc. に見られるが、これがホメーロス・ギリシア語ではどのような形で現れているのか、それを例示するとともに印欧語学の観点から子細に検討したい。

Ⅱ．ホメーロス・ギリシア語における語根アオリストの実例

後代（紀元前5～4世紀）のアッティカ方言と異なり、ホメーロス・ギリシア語にはかなり多くの語根アオリストが残っている。ここでは、アッティカ方言にも見られる τίθημι「置く」に対する ἔθηκα［単1］：ἔθεμεν［複1］のようなごく当たり前の例を除き、ホメーロス・

ギリシア語にはいったいどのようなものが残っているのかを例示したい。まず能動直説法から順に並べると、次のようになる:

e	［能］単1	ἕκη(ϝ)α	「点火する、焼く、焼き払う」(A40)
	2	κατ-έχευας	「注ぎかけた」(ξ38)
	3	ἔνεικε	「運んだ」(ξ74)
		σεῦε(ν)	「追い立てた、駆り立てた」(Z133, ξ35)
		ἐπ-έσσευε(ν)	「送り込んだ」(ν87)
		ἔχευε(ν)	「注いだ」(ν54, ν260)
		χεῦε(ν)	(ν189, π47)
		βῆ	「行った、赴いた」(A34, B16, X137, ξ532, etc)
		στῆ	「立った」(A197, B20, ν32, etc)
		ἔκη(ϝ)ε	(X170, δ764)
		ἕηκε	「放った」(A48)
ē		ἐγήρᾱ	「年取った」(H148, ξ67)
ø		ἔδῡ	「～の中に入った、(天体が)沈んだ」(X94, Ψ154)
		δῦ	(Φ118)
		φῦ	「生え出た、生まれた、生じた」(Z253, Z406)
		ἔκτα	「殺した」(Z205, M46)
?		οὖτα	「傷つけた、打った」(Z64)
ø	双3	ἀφ-έτην	「癒した」(Λ642)
		ἐδύτην	(Z19)
		βάτην	(A327, Ψ710)
(e)		βήτην	(Ψ685, M330)
		ἐβήτην	(Z40)
		στήτην	(A332, Φ285)
ø	複1	ἀπ-έκταμεν	「殺す」(φ 121)
	3	ἔφῡν	(ε481)
		κί(ϝ)ον	「行った、去った」(Z422, Ψ115, Ψ257)

		ἔβαν	(H429, H432, Ψ58, Ψ132, Ψ223, Ψ352, A606, B302, ν17, ξ87, ξ207)
		βάν	(M106)
		ἔσταν	(A535, B467, Z106, X473)
		στάν	(Ψ358, Ψ757)
		φθάν	「先んじて～した」(Λ51)
(e)		ἔχευαν	「積み上げた」(Ψ256)
		ἔνεικαν	(ν12)
ø	命単2	κλῦθι	「聞け」(A37, A451, Ψ770)
		κέκλυθι	(K284)
e		στῆθι	(X222, ν387)
	双2	ἔμ-βητον	「進め、急げ」(Ψ403)
ø	複2	κέκλυτε	(H67, H348, H368, ρ468, υ292)
e(?)		κλῦτε	(B56)
e	接単1	βήω	(Z113)
		θέω	(Sapph.36)
		γνώω	(ξ118)
	3	φθήῃ	(Π861)
		φθῇσιν	(Aeol.) (Ψ805)
e	複1	ἐπι-βείομεν	「登る」(κ334)
		δώομεν	「与える」(H299, H351)
		θείομεν	(A143, Ψ244, Ψ486, ν364)
		κή(ϝ)ομεν	「焼き払う」(H377, H396)
		κατα-κή(ϝ)ομεν	「焼き尽くす」(H333)
		χεύομεν	「積み上げる」(H336)
		στέωμεν < *στήομεν	(X231)
ø	希単3	δύη	「(感情・苦痛などが)とらえる」(ν286)
		ἐσ-βαίη	「入り込む」(M59)
		φύη	「生まれる」(Theoc.15.94)
e	不定法	χεῦαι	(Ψ45)

		βήμεναι	(Aeol.) (ξ327)
		στήμεναι	(Aeol.) (χ253)
ø		κατα-κτάμεν	(Aeol.)「殺す」(M172)
		κατα-κτάμεναι	(Aeol.) (Φ140, Φ170)
		θέμεναι	(Aeol.)「置く」(B285,Ψ45)
		δύμεναι	(Aeol.) (Z185, Z411)
?		οὐτάμεναι	(Aeol.) (Φ68)
ø分詞単主男		κι(ϝ)ών	(A35, M353, ν272, π472)
		κατα-κτᾰς	(X323)
		Πουλυ-δάμᾱς	原義「多くを斃した」(M60, M210,X100)
		παρα-φθᾰς	「先んずる、追い越す」(X197)
		ὑπο-φθᾰς	「先んずる、先んじて～する」(H144)
		ἀπ-οὑρᾱς	「取り除く、奪う」(A356, A507, B240, Z455, ν270)
e(?)		ἐπι-πλώς	「～の上を航行する、渡って行く」(Z291)
ø	女	φοῦσα /pʰŭsa/	(Boeot.) (Corinn.21)
	複主男	φύντες	(ν268)
(e)		χεύαντες	(Ψ257)
ø	［中］単1	λύμην	「解放された」(Φ80)
	2	ἔσσυο	「急いで行った、疾走した」(Π585, ι447)
e		ὑπ-έδεξο	「迎え入れた」(ξ54)
ø	3	ἔμ-πνῡτο	「意識を取り戻した、息を吹き返した」(X475, ε458)
		ἔπτατο	「飛んだ」(Π469)
		πτάτο	(Ψ880)
		ἀπ-έκτατο	「殺された」(O437, P472)
		ἔσσυτο	(ξ34)
		σύτο	(Φ167)
		ἔφθιτο	「滅びた、死んだ」(Σ100)
		ἀμφ-έχυτο	「周りに注がれた」(B41)
		χύτο	「注がれた」(Ψ385)
		λύτο	「ゆるんだ、萎えた」(Φ114)

		λῦτο	「解けた」(Ω1)
		ἀν-έπαλτο	「跳び上がった」(Ψ694)
		πρίατο	「買った」(ξ115)
		ἆλτο	(Aeol.)「跳んだ、とび出した」(A532, Z103, M81, M390, Φ174)
		ὦρτο	「立ち上がった、押し寄せた、突進した」(H162, H163, H211, M377, Φ248, Ψ214, Ψ288, Ψ290, Ψ293, Ψ708, Ψ811, Ψ812, Ψ836, Ψ859)
		ἔβλητο	「打たれた」(M306)
		βλῆτο	(Δ518)
		πλῆτο	「満ちた」(Φ16, Ψ777, ξ267, ξ307)
		πλῆτο	「近づいた」(Ξ438)
e		δέκτο	「受け取った」(B420)
		ὑπ-έδεκτο	「迎え入れた、もてなした、捉えた」(ξ52, ξ275, υ372)
		γέντο	「彼はつかんだ」(Θ43)
		κατ-έλεκτο	「横になった」(ν75)
		λέκτο	(δ453, ε487)
ø	複3	λύντο	「ゆるんだ、萎えた」(H12, H16)
		ἐσ-έχυντο	「流れ込んだ」(M470)
		χύντο	「散った」(Φ181)
		ἕντο	「放った」(A469, B432)
		ἐφθίατο	(Ion.)「滅んだ、死んだ」(A251)
e	命単2	λέξο	(Ω650)
e	接単1	βείομαι	「生きる(であろう)」(X431)
		κατα-θείομαι	「置く」(X111)
	3	ἅλεται	「とび込む」(Λ207)
		βλήεται	「打たれる」(ρ472)
		φθίεται	「滅びる、死ぬ」(Y173)
	複1	φθιόμεσθα	(Ξ87)
	希単2	βλῇο	(N288)
ø	不定法	φθίσθαι	(ξ117)

e		δέχθαι	(A23, A377)
ø分詞単主男		ἀπο-πτάμενος	「飛び去る」(B71)
		φθάμενος	「先んずる」(Ψ779)
		ἐξ-άλμενος	「とび出す」(Ψ399)
		μετ-άλμενος	「目がけてとびかかって後を追いかけて」(M305, Ψ345)
		βλήμενος	(Λ206)
e		δέγμενος	「待つ、待ちかまえる」(B794, υ385)
ø	女	πταμένη	(X362)
	対男	ἐπι-άλμενον	「跳び乗る」(H15)
		Ὄρμενον	［人名］原義「立ち向かった、突進した」(M187)
		βλήμενον	(M391)
	主/対 中	ὄρμενον	「生起した、わき起こった」(Φ14)
	属男	κταμένοιο	(X75, Ψ23)
		κατα-φθιμένοιο	「滅んだ、死滅した」(X288)
		βλημένου	(ρ490, ρ499)
	与男	ἀρη(ϝ)ϊ-κταμένῳ	「戦闘で殺された」(X72)
e	複主男	ποτι-δέγμενοι	(ep.)「待つ、待ちかまえる」(H415)
?		οὐτάμενοι	「傷つけられて」(Λ659)
e	女	ποτι-δέγμεναι	(ep.)「待つ、待ち迎える」(B137)
ø	属男	δαϊ-κταμένων	「戦いで殺された」(Φ146)

（出典個所に出てくる A, B, Γ...は、『イーリアス』の巻数で、Aを第1歌とし、以下アルファベットの順番で巻数が記されており、最後のΩが第24歌ということになる。同様に小文字の α, β, γ...は『オデュッセイア』の巻数である。）

以上が、現在までに私が調べ終えた範囲でのホメーロスに出てくる語根アオリストであるが、かなり多数保存された上に、印欧祖語の基本構造はほぼ完璧な姿で保存された。

基本的には、mi- 動詞とまったく同じアプラウトを行った。Helmut Rix（1976, 214頁）は、複数3人称のみが ø 階梯を取り、それ以外、すなわち、単数、双数、複数1・2人称は e 階梯をとると言っているが、これはインド・イラン語派とギリシア語に共通して行われた改新であり、なかんずくインド・イラン語派において徹底して行われたものである。こ

れについては後ほど詳しく論じたいが、最も基本的なパターンとしては、能動単数で e 階梯、それ以外(双・複数ならびに中動)では ø 階梯をとり、接続法は e 階梯をとる幹母音型活用、希求法は ø 階梯をとり、法接尾辞の部分が直説法的なアプラウトを行い、分詞はすべて ø 階梯をとった。命令法は数と人称の両方によるので、その片一方では割り切れない。中動態のみでしか現れない動詞、すなわち media tantum は基本的には e 階梯をとった。これは、mi- 動詞とまったく同じアプラウト構造であり、完了とも基本的にはまったく同じであった。完了とは分詞と media tantum の扱いが異なる(完了では後者は普通の中動とまったく同じ)が、それ以外、定型一般では直説法能動単数が同じ充実階梯ではあるものの、語根アオリストは e 階梯、完了は o 階梯という違いがある点を除き、まったく同じである。完了が名詞的に o 階梯をとるのは、動態である mi- 動詞とアオリストに対して、「過去の行為の結果としての状態相」といういわば静態であるからだと思われる。最も標準的なパラダイムの対応をあげると、次のようになる:

		Skt.		Hom.Gk		
単	1 *(é-)stéH$_2$-m	ákar-am	ásthā-m	ἔστην	ἔβην	ἔθηκα
	2 *(é-)stéH$_2$-s	ákar	ásthā-s	ἔστης	ἔβης	ἔθηκας
	3 *(é-)stéH$_2$-t	ákar	ásthā-t	ἔστη, στῆ	ἔβη, βῆ	ἔθηκε, θῆκε
双	3 *(é-)stH$_2$-téH$_2$m	ákar-tām	ásthā-tām	στήτην	βάτην	ἐθέτην
複	1 *(é-)stH$_2$-mé(n)	ákar-ma	ásthā-ma	ἔστημεν	ἔβημεν	ἔθεμεν
	2 *(é-)stH$_2$-té	ákar-ta	ásthā-ta	ἔστητε	ἔβητε	ἔθετε
	3 *é-stH$_2$-ṇt		ásthur	ἔσταν	ἔβαν	ἔθεσαν
	*stH$_2$-ént	ákr-an		στάν	βάν	
	「立った」	「した」			「行った」	「置いた」

以上は Beekes(1995, 236頁)に若干の手を加えて作成したものだが、この図で、これまで述べてきた語根アオリストのパラダイムアプラウトなるものがいかなるものかおわかりいただけたかと思う。詳細については、次章で見ていくが、ここでは語尾について若干述べてみたい。

まず、単数1人称で、Skt. では -am と -m という二つの形が、そして Gk. でも -α と -ν という2つの形が現れているが、これは子音の後の成節的な *-m̥ と母音の後の純子音的な *-m のインド・イラン語派とギリシア語における現れであって、語尾としてはひとつにさ

かのぼる。問題はむしろ複数3人称形である。Skt. には -ur と -an という二つの形がある。前者は完了からの借り物で、Lat. memin-ēre「記憶している」< IE *me-mn-ér-i の ø 階梯形で、ガーサー・アヴェスタ語の cikaitrš「思う」の -rš < IE *-r̥-s にぴったり対応する形であるが、ではなぜここで、-an という本来の語尾ではなく、完了語尾を使わなくてはならなかったのだろうか。私は、これは Beekes(1995, 236頁)が示唆しているとおりで、この -ur というのは、もともと同じく ø 階梯の語尾であった動態(現在、未来、アオリスト)の第二次語尾 *-n̥t が同じ ø 階梯の静態(完了)語尾 *-r̥s によって置き換えられてできた形(Skt. 的な現れ)であると断定したい。すなわちこの *-n̥t は、インド語派では死滅しかかっている形で、現に s- アオリストでも ájaiṣ-am [単1]「征服した」の複数3人称形は ájaiṣ-ur であった。これに対して Gk. では、ἔτεισ-α [単1]「償った」< IE *é-kʷēi-s-m̥ に対する複数3人称形は ἔτεισ-αν < IE *é-kʷei-s-n̥t で、もっと近縁の G.Av. では vraj- [歩く」の s- アオリスト複数3人称形は vrāxš-at < IE *wréĝ-s-n̥t (Beekes: 1988, 185頁)であって、印欧祖語伝来の *-n̥t は保持された。Gk. では -α-、G.Av. では -a- が出ているが、これは成節の *n̥ のギリシア語ならびにインド・イラン語派的な現れであり、なんら問題はない。むしろ問題は *n̥ が現れるアプラウト環境である。ここでは s- アオリストでこの形が現れているが、s- アオリストというのは、後で詳しく述べるが、パラダイム内において常に充実階梯(e 階梯、ē 階梯、ō 階梯)しか出てこない印欧祖語の static inflection に属するひとつのパラダイム形態であって[1]、アクセントは常に語根ないしは語幹に落ちた。したがって、後続の *-ent はその e 母音を失い *n̥t となったわけで、ここに語根アオリストの複数3人称形として二形を立てる必要性が生じるのである。すなわち、augmentum の *é- を持つ形では augment にアクセントがあるために語尾は ø 階梯をとって *-n̥t で現れ、持たない形では本来の *ent が現れた。図式化すると、augmentum 形では é-R(ø)-n̥t 、非augmentum 形では R(ø)-ént となる。これは複数3人称だけについていえることではなく、語根アオリストや mi- 動詞、完了といった非幹母音型活用全般にわたっていえることであって、単数で e 階梯をとるのは語尾が ø 階梯でしか現れえないからであり、双・複数で ø 階梯をとるのも語尾が充実階梯をとっているからである。なお語根アオリストの複数3人称の場合は、語根アオリスト内部に更なる傍証があり、中動態の複数3人称は Skt. で -ata と -anta という二つの語尾があるが、この分布状況が上述の説の正当性を雄弁に物語っている。すなわち、この表の ákar-am の中動複数3人称形は、augmentum 形では ákrata < IE *é-kʷr̥-n̥to 、非 augmentum 形(繋辞法 injunctive)では kránta < IE

*k^{w}r-énto であり(Beekes:1995, 236頁)、また yunájmi「軛に繋ぐ」< IE *yu-n-ég-m-i の語根アオリスト中動複数3人称の繋辞法の形は、 yujanta < IE *yug-énto (Rix:1976, 248頁)であった。この区別はおぼろげながら Hom.Gk. にのこっており、 ἐφθίατο (A251)「滅んだ、死んだ」< IE *éd^{h}g^{wh}iy-n̥to と ἕντο (A469)「放った」< IE *iH$_1$-énto は、本来この区別を反映した形だったのだろう。

ここでの Hom.Gk. での諸形より導き出される図式をまず結論的に述べると、以下のようになる。音韻環境上の e 階梯は括弧でくくっておく:

直説法能動単数	(é)C$_1$éC$_2$-D(ø)	(é)C$_1$éRC$_2$-D(ø)
その他	(é)C$_1$(e)C$_2$-D(é/ó)	(é)C$_1$R̥C$_2$-D(é/ó)
接続法	C$_1$éC$_2$-e/o-D	C$_1$éRC$_2$-e/o-D
希求法能動単数	C$_1$(e)C$_2$-yéH$_1$-D(ø)	C$_1$R̥C$_2$-yéH$_1$-D(ø)
その他	C$_1$(e)C$_2$-iH$_1$-D(é/ó)	C$_1$R̥C$_2$-iH$_1$-D(é/ó)
命令法能動単2	C$_1$(e)C$_2$-d^{h}í	C$_1$R̥C$_2$-d^{h}í
3	C$_1$éC$_2$-t-u	C$_1$éRC$_2$-t-u
複2	C$_1$éC$_2$-te(-n)	C$_1$éRC$_2$te(-n)
	~ C$_1$(e)C$_2$-té(-n)	~C$_1$R̥C$_2$-té(-n)
3	C$_1$(e)C$_2$-ént-u	C$_1$R̥C$_2$-ént-u

分詞は、音韻階梯場の e 階梯を除き、語根を C$_1$eC$_2$- で代表させると:

能動単数主格	C$_1$C$_2$-ṓn	C$_1$C$_2$-ént-s
呼格	C$_1$C$_2$-ónt	C$_1$C$_2$-ént
その他強格	C$_1$C$_2$-ónt-D	C$_1$C$_2$-ént-D
弱格	C$_1$C$_2$-n̥t-D́	
単数位格	C$_1$C$_2$-ént-i	
中動男	C$_1$C$_2$-mH$_1$nó-s　女 -éH$_2$	中 -ó-m

となる。ただし、分詞はここでは男性形で代表させた。女性は、ギリシア語とインド・イラン語派とが一致して示すところによると、単数主格 C$_1$C$_2$-n̥t-íH$_2$ 、C$_1$C$_2$-n̥t-íH$_2$-m 、属 C$_1$C$_2$-n̥t-yéH$_2$-s というように、常に女性接尾辞の上にアクセントが落ち、この部分が強格で ø 階梯で、弱格で e 階梯という交替を行うのみで、語根と分詞接尾辞は常に ø 階梯

で無アクセントである。しかし、これは印欧祖語の末期に整理統合されてできたアプラウトパターンであり、本来は iH_2- 語幹も他の子音語幹同様、強格と弱格の間でアプラウトを行ったのだった。これはたとえば、Gk. に残る ὄργυια (Ion.) (Ψ327)「一尋(= 6 πόδες, 約 1.8m)」、対 ὄργυιαν (ι325), 属 ὀργυιῆς (Hdt.2.149), 別形 ὀρόγυια (詩)(対 -αν Pi.*P*.4.228) < IE *H_3réĝ-us-iH_2, 対 *H_3réĝ-us-iH_2-m, 属 *H_3r̥ĝ-us-yéH_2-s や、ἄγυια「道、街」、対 ἄγυιαν (Y254), 与 ἀγυιᾷ (P Oxy 722.12 (i A.D)), 複主 ἀγυιαί (β388) < IE *H_2éĝ-us-iH_2, 対 *H_2éĝ-us-iH_2-m, 与 *H_2ĝ-us-yéH_2-ei, 複主 *H_2ĝ-us-yéH_2-i や、Πλάταια「Βοιωτία の町、第三次ペルシア戦役の古戦場」、対 Πλάταιαν (B504), 属 κραταιᾶς (詩)「強い、激しい」< IE *pl-ét-H_2-w-iH_2, 対 *pl-ét-H_2-w-iH_2-m, 属 *kr̥t-w-iyéH_2-s (語根は異なるが交替は察せられる)といったごく限られた化石的な例より察するに、単数主格 R(é)-S(ø)-iH_2, 対格 R(é)-S(ø)-$\overset{i}{\vee}H_2$-m, 弱格 R(ø)-S(ø)-yéH_2-D といったパラダイムアプラウトを行ったと考えられる[2]。なお、語根アオリスト分詞女性形に関しては、管見のかぎりでは、こういった交替を行うものはまだ見つかっていないので、本稿では省略させていただく。見つかりしだい述べてみたい。

以上のような諸事実をふまえて、次章では、ホメーロス・ギリシア語に出てくる具体的な形を子細に検討してみたい:

Ⅲ. 語根アオリストのアプラウト構造とそのホメーロス・ギリシア語での反映

i) mobile type (アクセント可動型)

ホメーロス・ギリシア語では、能動・中動間のアプラウトや分詞の ø 階梯はほぼ完全な姿で保存された。中動態と分詞は、音韻環境上の e 階梯と media tantum の e 階梯を除くと(δέκτο (B420), δέγμενος (B794, υ385) は IE *déḱ-to, *déḱ-mH_1no-s である)、すべて ø 階梯であり、能動単数もきほんてきには e 階梯である。第2章での例よりまとめあげると、以下のようになる:

α) 能動 e 階梯 : 中動 ø 階梯

① 能単3　χεῦε (ν189, π47), ἔχευε(ν) (υ54, υ260) < IE *(é-)ĝʰéu-t

　:中単3　χύτο (Ψ385), ἀμφ-έχυτο (B41) < IE *(é-)ĝʰu-tó

複3　χύντο (Φ181), ἐσ-έχυντο (M470) < IE *(é-)ĝ^{h}u-ntó

② 能単3　σεῦε(ν) (Z133, ξ35), ἐπ-έσσευε(ν) (υ87) < IE *(é-)kyéu-t

:中単2　ἔσσυο (Π585, ι447) < IE *é-kyu-so

3　σύτο (Φ167), ἔσσυτο (ξ34) < IE *(é-)kyu-tó

③ 能単3　ἕηκε (A48) < IE *é-yeH_1-k-t

:中複3　ἕντο (A469, B432) < IE *iH_1-énto

④ 能単1　ἔφθην < IE *é-d^{h}g^{wh}eH_2-m̥

:中分詞　φθάμενος (Ψ779) < IE *d^{h}g^{wh}H_2-mH_1nó-s

β)能動 e 階梯

① 能単1　ἔκη(ϝ)α (A40) < IE *é-keH_2w-m̥

(ø 階梯形:受動アオリスト不定法 κα(ϝ)ήμεναι (Aeol.) (Ψ198, Ψ210), καύστειρα, 属 -ης (M316)「燃えるような、激しい」)

② 能単3　ἔνεικε (ξ70) < IE *H_1nek̑-t ≒ Ved. ánat̥

(o 階梯形:完了 ἐνήνοχα < IE *H_1ne-H_1nók̑-H_2e, Russ. носи́ть [反復態]「運ぶ」, Lith. našýti (同) < IE *H_1nok̑-éye-)

γ)中動 ø 階梯

① 中単3　ἔφθιτο (Σ100) < IE *é-d^{h}g^{wh}i-to

複3　ἐφθίατο (A251) < IE *é-d^{h}g^{wh}iy-n̥to

不定法　φθίσθαι (ξ117) < IE *d^{h}g^{wh}i-d^{h}-yéH_2-ei

分詞属　κατα-φθιμένοιο (χ288) < IE *d^{h}g^{wh}i-mH_1nó-syo[3]

(充実階梯:能動アオリスト ἔφθεισα「滅ぼした、殺した」, φθόη「減少、衰亡」)

② 中分詞女 Κλυμένη (Σ47) < IE *k̑lu-mH_1n-éH_2

(充実階梯: κλέ(ϝ)ος「噂,名声、誉れ」, Skt. śrávas, Av. srauuō, OCS slovo, 属 slovese, Russ. сло́во, 複((旧)) словеса́ < IE *k̑léw-os, Skt. 語根アオリスト単3 áśrot < IE *é-k̑leu-t)

③ 中単1　λύμην (Φ80) < IE *lu-mH_2-m̥(?) (*H_2 は確実)

3　λύτο (Φ114), λῦτο (Ω1 hapax) < IE *lu(-H_2)-tó

複3　λύντο (H12, H16) < IE *lu-ntó

(充実階梯: Skt. s- アオリスト単1 álāviṣam < IE *é-lēwH_2-s-m)

④ 中単3　ἔμ-πνῦτο (X475, ε458) < IE *pnu(-H_x)-tó

（充実階梯：ἀπο-πνείουσα (Z182)［分詞女］「息を吐く」，πνοιή，与 -ῆ (Ψ215, Ψ380)「風、風の一吹き」、あえぎ、呼吸、息吹」< IE *pnow-iyéH_2-ei）

⑤ 中単3　ἀπ-έκτατο (O437, P472) < IE *é-kþn̥-to

（充実階梯：未来単2 κτενέεις (X13), 完了単1 ἀπ-έκτονα < IE *ke-kþón-H_2e

⑥ 中単3　πτάτο (Ψ880), ἔπτατο (Π469) < IE *(é-)ptH_2-tó

分詞女 πταμένη (X362) < IE *ptH_2-mH_1n-éH_2

（充実階梯：未完了過去双3 πετέσθην (X400, Ψ381, Ψ506), 完了複3 πεποτήαται (Ion.) (B90), ποτή，与 -ῆ (ε337)「飛ぶこと、飛行」，πωτάομαι，　未来完了過去複3 πωπῶντο (M287)（詩）「飛び回る」< IE *pōtH_2-eH_2-yó-nto）

⑦ 中単3　βλῆτο (Δ518), ἔβλητο (M306) < IE *(é-)g^{w}lH_2-tó

分詞　βλήμενος (Λ206) < IE *g^{w}lH_1-mH_1nó-s

（充実階梯：βέλεμνα (X206)［複］(詩)「飛び道具」< IE *g^{w}élH_1-mn-H_2,　βέλος (A51, X292, υ305)「飛び道具」< IE *g^{w}élH_2-os, έπεσ-βόλος, 対 -ον (B275)「口ぎたない」< IE *g^{w}olH_1-ó-s　— ◡ ◡́ > — ◡́ ◡）

⑧ 中単3　πλῆτο (Φ16, Ψ777, ξ267, ξ307) < IE *plH_1-tó

（充実階梯：πολύς「多い」，最上級 πλεῖστος, Av. fraēšta- < IE *pólH_1-u-s, 最上級 *pléH$_1$-is-to-s, Gth. filu［中性］< IE *pélH$_1$-u, Skt. párīmaṇ-i［位格］< IE *pélH_1-men-i）

⑨ 中単3　πλῆτο (Ξ438) < IE *plH_2-tó

（能動アオリスト不定法 πελάσσαι (Ψ719) < IE *pélH$_2$-s-eH_2-i, 中動未完了過去単3 πίλνατο (Ψ368) < IE *pl-n-H_2-tó［n- 接中辞形］）

⑩ 中単3　ἀν-έπαλτο (Ψ694) < IE *é-pl-to

（充実階梯：Lat. pellō, 完了 pepulī「駆り立てる」< IE *pél-d-o-H_2, 完了 *pe-pól-H_2e-i）

⑪ 中単3　ὦρτο (H162, H163, H211, M377, Φ248, Ψ214, Ψ288, Ψ290, Ψ293, Ψ708, Ψ812, Ψ836, Ψ859) < IE *é-H_3r̥-to = Ved. ārta

分詞中 ὄρμενον (Φ14) < IE *H_3r̥-mH_1nó-m

⑫ 中単3　ἆλτο (Aeol.) (A532, Z103, M81, M390, Φ174) < IE *é-sH_2l-to

分詞　μετ-άλμενος (M305, Ψ345) < IE *sH_2l-mH_1nó-s

(Lat. saliō「跳ぶ」)

⑬　中単3　πρίατο (ξ115) < IE *k^wriH_2-tó = Myc. qi-ri-ja-to (k^wriato)

(Skt. krīṇámi, 複1 krīṇīmás < IE *k^wri-n-éH_2-m-i, 複1 *k^w rī-n-H_2-més)

以上をご覧になっておわかりのとおり、語根アオリストのパラダイム内アプラウトは、第2章で述べたように mi- 動詞の中の語根現在とまったく同じ交替を行った。γ)では、①—⑨に、とりわけギリシア語内部のデータからも明らかに ø 階梯であるという例をあげており、うち⑥—⑨はラリンガルに終わる二音節語基である。⑦—⑨は、一見したところ充実階梯のようであるが、CR̥H_xC がギリシア語では CRV̄C となったことを考えれば(στρωτός「寝具を敷き述べた」< IE *str̥H_3-tó-s, *-nó-s = Skt. stīrṇá-s; cog.Lat. sternō, ere, strāvī, strātum「打ちのめす」)、ø 階梯と見るべきだろう。( )内の同源語の例はラリンガルの音色がわかるような例を選定しておいた。IE *H_1, *H_2, *H_3 > Gk. ε, α, o だからである。⑩—⑬は、構造上は ø 階梯と考えられるが、充実階梯が見いだしにくいか、または見いだせない例である。最後の⑬は上例に倣って二音節語基にした。

このホメーロス・ギリシア語の語根アオリストの能動・中動間のアプラウトは、そのままの形では他語派とは対立しにくいが、(γ)⑪の ὦρτο = Ved. ārta が唯一の対応か?)、図式的ないしは補充的には他語派ときれいに対応する。例えば、γ)⑧の πλῆτο (Φ16, Ψ777, ξ267, ξ307) < IE *pl̥H_1-tó は、ギリシア語では能動形は失われて存在しないが、ヴェーダ語には áprāt [単3] < IE *é-pleH_1-t という Samprasārana- 型[4]の e 階梯を示す能動形があり、しかもこれは命令法単2 pūrdhi < IE *pl̥$H_1$$d^h$í という *-$d^h$í による ø 階梯を示す命令法まで持っている。またアナトリア語派でも、古期ヒッタイト語には、中動単3 lukta (KBo XVII 13x+1)「夜が明ける」< IE *luk-tó という印欧祖語の語根アオリスト繋辞法にさかのぼりうる ø 階梯を示す中動形があり、この分詞形には同じく ø 階梯を示ししかも接尾辞部にアクセントを持つヴェーダ語の rucāná- < IE *luk-m̥H_1nó-s が対応する (Oettinger: 1979, 277頁)。なおヒッタイト語の場合は、語根動詞としての mi- 動詞が優勢であった言語であり、しかも時制は現在と過去しかなかったので、語根動詞の過去形は基本的に語根アオリストであったと見てよい[5]。代表的な例をあげると、現在単3 merzi, 同中動形 martari「消える」< IE *mér-t-i, 中 *mr̥-tó-r という、能動単数 e 階梯:中動 ø 階梯というアプラウトを示す語根動詞の過去形には、能動単3 merta /mért/ < IE *mér-t という e 階梯形を示す能動形があり(Oettinger: 1979, 20/105頁)、現在単1 ḫuekmi (StBoT8), 複3

ḫukanzi「屠殺する」< IE *H_2wéĝ-m-i, 複3 *H_2ug-ént-i という、単数 e 階梯:複数 ø 階梯を示す語根動詞の過去形には、能動単3ḫᵘekta < IE *H_2wéĝ-t という同じく e 階梯を示す能動形があったが、しかしこの語には現在単3 ḫunekzi < IE *H_2u-n-éĝ-t-i なる n- 接中辞形も存在した。つまりこれはどういうことかというと、n- 接中辞は機能的には現在幹(現在と未完了過去を形成した語幹)の指標であったので(Lat. rumpō, 完了 rūpō「壊す」< IE *ru-m-p-óH_2, 完了 róup-H_2e-i)、過去形 ḫuekta には n- 接中辞形の現在も存在したのである。すなわちこれは、γ)⑨の πλῆτο (Ξ438)「近づいた」と n- 接中辞形の未完了過去(現在幹)単3 πίλνατο (Ψ368) の関係とまったく同じであり、ここに過去形が語根アオリストとして分離独立する必然性が生じたのである(Oettinger: 1979, 102頁)。要は語根アオリストというのは、何も特殊な形ではなく、現在形のほうが特殊なのであって、一般に印欧祖語では、現在形は語根に n- 接中辞なり *-ye/o-, *éye/o-, *eH_2-yé/o, *sk̑é/ó- といった何らかの接尾辞なりをくっつけたり、加音 i による畳音(例えば未過単3 δίδη (Λ105)「縛る」< IE *dí-deH_1-t)を行ったりして形成されたのであった。

このように、ホメーロス・ギリシア語の語根アオリストの能動・中動間のアプラウトは他語派からの強力なデータによっても支持されるが、それに比べると、能動での単数・双複数間のアプラウトは極度に保存が悪かった。かろうじて保ちえているものを列記すると、以下のようになる:

① 能単3 βῇ (A34, B16, X137, ξ532) < IE *g^wéH_2-t ≒ Ved. á-gāt

双3 βάτην (A327, Ψ710) < IE *$g^w$$H_2$-té$H_2$m

複3 βάν (M106) < IE *$g^w$$H_2$-ént

ἔβαν (A606, B302, H429, Ψ132, ν17, ξ207) < IE *é-$g^w$$H_2$-nt

② 能単3 στῇ (A197, B20, υ32) < IE *stéH_2-t ≒ Ved. ásthāt

複3 στάν (Ψ358, Ψ757) < IE *stH_2-ént

ἔσταν (α535, B467, Z106, X473) < IE *é-stH_2-nt ≒ Ved. ásthur

③ 能単1 ἔφθην < IE *é-$d^w$$g^{wh}eH_2$-m

複3 φθάν (Λ51) < IE *$d^h$$g^{wh}$$H_2$-ént

④ 能単3 ἔηκε (A48) < IE *é-yeH_1-k-t

双3 ἀφ-έτην (Λ642) < IE *yH_1-téH_2m

⑤ 能単3 σεῦε(ν) (Z133, ξ35) < IE *kyéu-t

ἐπ-έσσευε(ν) (υ87) < IE *é-kyeu-t

複3　κί(ϝ)ον (Z422, Y115, Ψ257) < IE *kiw-ónt ← *kiw-ént

分詞　κι(ϝ)ών (A35, M353, ν272, π472) < IE *kiw-ōn

⑥　能複1　ἀπ-έκταμεν (ψ121) < IE *ékþn̥-me(n)

なお、アッチカ方言にも見られるアプラウトとしては、単1 ἔθηκα：複1 ἔθεμεν「置いた」、単1 ἔδωκα：複1 ἔδομεν「与えた」etc があるが、これらも含めて、Hom. でも数によるアプラウトを行うのは厳密にはラ　リンガル終わりの語根に限られている。これを除くと、別単語にはなったものの、単3 σεῦε(ν)「追い立てた、駆り立てた」：複3 κί(ϝ)ον, 分詞 κι(ϝ)ών「行った、去った、来た」という上例の⑤があげられるだけだが、この語は α)②にも見られるように、中単3 σύτο (Φ167), ἔσσυτο (ξ34) < IE *(é-)kyu-tó と ø 階梯の中動形を保存している。能動単数 e：双複数 ø：中動 ø という印欧祖語のアプラウトが、別単語に分裂してではあるが、かろうじて保存されている非ラリンガル語根での唯一の貴重な例である。分詞では、接尾辞部に κι(ϝ)ών とアクセントが落ちることが、この語が本来は語根アオリストであったことを如実に物語っている。mi- 動詞ではあるが、εἶμι「私は行く」< IE *H_1éi-m-i (=Skt. émi, OLith. eimi) に対する分詞 ἰών, 対 ἰόντα < IE *H_1(i)y-ōn, *H_1y-ónt-m̥ (Skt. yán, 対 yántam, G.Av. 対 yantam, OLith. 対 eñtį, Lat. iēns < IE *H_1(i)y-ént-s) を参照のこと。

このように、インド・イラン語派では生産的ではなかったもののまだ規則ではあった語根アオリストの単複のアプラウト（ただし複数3人称のみが ø 階梯）は、ギリシア語ではホメーロスにおいても絶滅寸前であった。インド・イラン語派では、Skt. 単3 ágan：複3 ágman, G.Av. 単3 jan：複3 gman「行った」< IE *(é-)g^wém-t : *(é-)g^wm-ént (Goth. qiman, 過去 qam, 複3 qemun「来る」), Skt. 単3 ákar：複3 ákran, G.Av. 単3 cart「作った」< IE *(é-)k^wér-t : *(é-)k^wr-ént, G.Av. 単3 yaugt : 複3 yujan「軛に繋いだ」(Lat. jungō「繋ぐ」, jugum「軛」, Gk. ζεῦγος「軛に繋いだ一組の牛馬」, ζυγόν「軛」, Skt. yugám「軛」, Hitt. yugan「軛」) < IE *yéug-t : *yug-ént, etc. 枚挙にいとまがなく、複数3人称が文証されないものでも、G.Av. 単2 varš「働いた」< IE *wérĝ-s (Gk. (ϝ)ἔργον, Germ. Werk「仕事」), G.Av. 単3 vaxšt「成長させた」< IE *H_2wég-s-t（語幹：Gk. ἀ(ϝ)έξω（詩）「成長させる」、語根：Skt. ójas「力」）のように、単数は e 階梯を示す。また中動では、G.Av. 単3 drta「待った」< IE *d^hr̥-tó, 複2 [a]sru(ž)dvam「聞いた」< IE *(é-)k̑lu-d^hwé（命令法単3 srautu

< IE *ḱléu-t-u) のように ø 階梯をとり、ギリシア語での交替と軛を一にしている。 media tantum で G.Av. 単2 manha, 3 manta「考えた」< IE *mén-so, *mén-to (Gk. μένος「力、活力、激しさ」)と e 階梯をとるというのもギリシア語と同様であったが、これについては次節で詳しく述べたい。なお、G.Av. manta に対応するヴェーダ語形は ámata < IE *é-mn̥-to であるが、これは印欧祖語の定石どおり、中動的に ø 階梯を示しているととることもできるし、また、アクセントを持つ augmentum *é- が語頭に来たおかげで語根部が ø 階梯をとるに至ったととることもできる。後者の場合だと、第2章で論じた *-ént と *-´nt, *-énto と *-´nto という複数3人称の第二次語尾の分布条件とそっくりであり、e 母音の着脱はアクセントの有無にかかっているという印欧祖語のひとつの性格を垣間見るようで面白い。

以上が、印欧祖語の語根アオリストの標準型ともいうべき mobile type のホメーロス・ギリシア語での現れである。

ii) media tantum (中動専用活用)

上の i)節で詳述した mobile type というのは、語根アオリストだけに限らず、mi- 動詞、完了、さらには非幹母音型名詞までをも含んだ印欧祖語の非幹母音型屈折の最も標準的なタイプであったが、それは強語幹(動詞だと能動単数、名詞だと主・呼・対格と単数位格)と弱語幹(動詞だと双・複数と中動、名詞だと属・与・具格と双・複数位格)の対立が見られる語において最も優勢なタイプであったというだけのことであって、必ずしもこの活用を行ったわけではなかった。なかでも弱語幹である中動形しか持たない動詞活用の場合は、アクセント移動はおろか、アプラウトすら行わなかった。これは mi- 動詞と語根アオリストに限られ、本来、静態であり中動現在と機能的語尾的相関関係を持った完了(γίγνομαι「生まれる、生ずる」なる中動現在の完了形が単3 γέγονε (T122), 双3 ἐκ-γεγάτην (κ138) [過去完了]と能動形をとることを参照されたい; これについては、近々別の論文で詳述したい)には見られなかった。これを印欧語学の用語で media tantum というが、例えば mi- 動詞には次のようなものがあった:

①「横たわる」		IE
α) 現在単2	κατά-κειαι (*h. Merc.* 254), Arcad. κεῖοι <	*ḱei-so-i
3	κεῖται (Z47, H230, X163, ν424, ξ136, υ130), Cypr. κεῖτυι <	*ḱéi-to-i
複3	κέαται (Ion.) (Λ659) <	*ḱéy-n̥to-i

*-r による別形

現在単3 OHitt. kitta, Pal. kītar/kídar/, Lyc. sitẽni < p.Anat. *k̑ḗdor < IE *k̑éi-to-r

Ved. IE

β) 現在単3 śáye < *k̑éy-o-i ~ *k̑éy-o-r = Luw. zīyar, Lyc. sijẽni

複3 śére < *k̑éi-ro-i = Av. sōire

未過複3 áśeran < *é-k̑ei-ro(-nt)

②「着ている」

完了単3 ἐπι-(ϝ)εσται (Orac.ap.Hdt. 1.47) < *wés-to-i = Skt. váste, G.Av. vastai

~ *wés-to-r = OHitt. wēšta

過去単3 (ϝ)ἕστο (Ψ67, ω158) < *wés-to

ἕ(ϝ)εοτο (M464) < *é-wes-to = Skt. ávasta (AV)

複3 εἵατο (Ion.) (Σ596) < *wés-n̥to = OHitt. wēššanta

分詞中 κατα-(ϝ)ειμένον (ν351)「おおわれた」< *wés-mH̥₁no-m

③「座っている」

現在単1 ἧμαι (ξ41) < *H_1é-H_1s-(m-)H_2e-i

3 ἧσται (ν337, ν424) < *H_1é-H_1s-to-i = Skt. áste

~ *H_1é-H_1s-*o*-r = OHitt. eš*a*

複3 εἵαται (Ion.) (B137) < *H_1é-H_1s-n̥to-i = Skt. ásate

~ *H_1é-H_1s-n̥to-r = OHitt. ešanta

未過単3 ἧστο (A512, Z324, Y451) < *H_1é-H_1s-to = Skt. ásta

複3 ἧατο (Ion.) (H61, H65, Ψ128, υ106) < *H_1é-H_1s-n̥to-i = Skt. ásata

④ 現在複3 δέχαται (Ion.) (M147)「待ちかまえる」< IE *dék̑-n̥to-i

⑤「守る、保護する、遵守する」

現在単3 ἔρῦται (A.R.2.1208) < IE *séruH_x-to-i

未過単2 ἔρῦσο (X507) < *séruH_x-so

3 ἔρῦτο (Ψ819) < *séruH_x-to

⑥ 未過単3 δέατο (ξ242)「～のように見えた、思われた」< IE *déyH̥₂-to

⑦ ἔρᾶμαι「愛する、恋い焦がれる、熱望する」< IE *érH̥₂-(m-)H_2e-i

⑧ κρέμαμαι「つりさげられる,宙ぶらりんの状態である」

< IE *krémH̥₂-(m)H_2e-i

一見しておわかりのとおり、media tantum の mi- 動詞は一貫して e 階梯をとった。もともと中動相は数によるアプラウトを行わず、したがって階梯は一貫していたが、これが通常の ø 階梯ではなく e 階梯であったのが media tantum の特色である。これは語根アオリストについても当てはまったが、ホメーロス・ギリシア語では次の三語が確認できる:

①「受け取った」　　IE

単2　ὑπ-έδεξο (ξ54)「迎え入れた」< *é-deḱ-so

3　δέκτο (B420) < déḱ-to

ὑπ-έδεκτο (ξ52, ξ275, υ372)「迎え入れた、もてなした、捉えた」

< *é-deḱ-to

分詞　δέγμενος (B794, υ385)「待つ、待ちかまえる」< *déḱ-mn̥no-s

不定法　δέχθαι (A23, A377), ὑπ-δέχθαι (H93)「受け入れる」< *déḱ-dʰ-yeH₂-ei

②「横になった」　　IE

単3　λέκτο (δ453, ε487) < *légʰ-to

κατ-έλεκτο (ν75) < *é-legʰ-to

命単2　λέξο (Ω650) < *légʰ-so

(λέχος (A609) (詩)「寝床、寝台、死の床、棺」, ἄ-λοχος (X88, υ87)「妻、妾」, OE licgan > E lie「横たわる」, OE lagu > E law「法」< IE *lógʰ-u-s, Hitt. lāgi「もたれる」< IE *lógʰ-e-i [完了] cf. Gk. λελοχυῖα (Hsch) [完了分詞女性形])

③　単3　γέντο (Θ43)「彼はつかんだ」< IE *gém-to

(γέμω「いっぱいである、満ちている、積んでいる、負っている」, γόμος 「船荷、積み荷」)

一見しておわかりのとおり、見事なまでに e 階梯で一貫している。CeT- の語根、その中でもなかんずく TeT- の語根は、非成節子音の前ではけっして e 階梯になることはないので、①②の場合は音韻環境上の e 階梯の可能性もあるが、③の場合は明らかにそうではなく、基本的に media tantum の e 階梯は、ギリシア語なかんずくホメーロスでは、保存されたと見てよかろう。

iii) 命令法、接続法、希求法

i)節、ii)節では、基本的に直説法と不定法・分詞を扱ってきた。ii)節の media tantum では、λέξο (Ω650) なる命令法も載せて、他の法ともども一貫して e 階梯であることに言及しているが、これは media tantum の語根アオリストの例があまりにも少ないからである。したがって、ここでは mobil type の例について述べてみたい。

まず結論から先に言うと、印欧祖語のアプラウト階梯が基本的には維持された。事例の少ない命令法・希求法から先に示すと、以下のようになる:

[能]命単2	κλῦθι (A37, A451, Ψ770)	<	IE *ḱlu-d^{h}í = Ved. śrudhí
	κέκλυθι (K284)	<	IE *ḱe-ḱlu-d^{h}í
	στῆθι (X222, ν387)	<	IE *steH_2-d^{h}í
双2	ἔμ-βητον (Ψ403)	<	IE *g^{w}éH_2-tom(?)
複2	κέκλυτε (H67, H348, H368, ρ468, υ292)	<	IE *ḱe-ḱlu-té
	κλῦτε (B56)	<	IE *ḱléu-te = Ved. śróta, G.Av. srauta
希単3	δύη (υ286)	<	IE *duH_x-yéH_1-t
	φύη (Theoc.15.94)	<	IE *b^{h}uH_x-yéH_1-t = Skt. bhūyā́t
	ἐμ-βαίη (M59)	<	IE *g^{w}ḯH_2-yéH_1-t
[中]希単3	βλῇο (N288)	<	IE *g^{w}i̯H_1-iH_1-só

希求法がすべて ø 階梯をとっているのは、ご覧のとおりである。非幹母音型活用の希求法は、法接尾辞の部分が能動単数で e 階梯 *-yéH_1- 、その他(双・複数、中動)で ø 階梯という印欧祖語の mobile type の交替を行ったが、これはホメーロス・ギリシア語では維持された。上例の語根アオリストも例外ではない。中動の βλῇο (N288) は ø 階梯の法接尾辞を示している。なお、法接尾辞の単数 e 階梯 : 双・複数 ø 階梯という数による交替は、インド・イラン語派では失われてなくなったが、ギリシア語と上代ラテン語では保存された。例えば、存在動詞の希求法は、上代ラテン語では接続法となりはしたものの、単1 siem, 2 siēs, 3 siēd (C.I.L. I_2, 4) > siet, 複1 sīmus, 2 sītis, 3 sient < IE *H_1s-yéH_1-m, *H_1s-yéH_1-s, *H_1s-yéH_1-t, *H_1s-iH_1-mé, H_1s-iH_1-té, H_1s-iH_1-ént という具合に、その法接尾辞の数による交替たるや、見事なまでに保存されたのである。

命令法は、ギリシア語では ø 階梯によって均されたが、これは単数3人称以外、すなわち単数2人称、複数2・3人称という残りの三つがすべて ø 階梯をとったからである。単

数3人称の e 階梯は、G.Av. jantu「行くがよい」、srautu「聞くがよい」< IE *g^{w}ém-t-u, ḱléu-t-u, etc, インド・イラン語派に保存されている(Beekes: 1988, 178頁)。複数2人称も、インド・イラン語派とアナトリア語派の巣召す証拠によると、e 階梯をとりえたが、κλῦτε (B56) はその名残であろうか。

以上見てきたように、命令法と希求法に関しては、そのアプラウト階梯がかなり残っているが、接続法に関しては、基本的には直説法の形で均されたようである。ただ、語幹と語尾との間に幹母音 *-e/o をはさんで造るという印欧祖語本来の形成法は、ホメーロス・ギリシア語ではかなり保存されたもようである。なお、非幹母音型活用の接続法が数・態によるアプラウトを行わず、すべて e 階梯をとったらしいことは、インド・イラン語派に完璧に保存されているほか、さまざまな状況証拠より明かである。例えば、単3 *H_1és-t-i, 複3 *H_1s-ént-i (< Lat. est, sunt) という数による交替を行った存在動詞も接続法では、単3 *H_1és-e-t(-i), 複3 *H_1és-o-nt(-i) (G.Av. ahat(i), ahan, Lat. erit<OLat. esed , erunt) と一貫して e 階梯をとったし、完了形でも、単1 (ϝ)οἶδα (Z367, H240, Sapph. 36), 複1 (ϝ)ἴδμεν (A124, B486, Ψ890) < IE *wóid-H_2e, *wid-mé(n) という直説法にはまったく e 階梯を持たない単語の接続法も、ホメーロスでは、複1 (ϝ)εἴδομεν (A363, X130, X244), 2 (ϝ)εἴδετε (Θ18) < IE *wéid-o-me(n), *wéid-e-te と e 階梯をとった。かかる事実に鑑みるに、非幹母音型活用のひとつとしての語根アオリストの接続法も e 階梯をとっていたことは想像に難くなく、したがって、第2章の表では接続法のところだけ左に何階梯かを書かなかった。ギリシア語は直説法の階梯で均してしまったからである。

iv) 特殊形ならびに語根アオリストにおけるstatic inflection の存在の可能性

以上三節にわたって、ホメーロス・ギリシア語における語根アオリストについて詳しく解析してきたが、以上に述べたことはあくまでも語根アオリストというカテゴリーに対して印欧祖語が持っていた大原則であって、やはり語根アオリストにも例外はあった。ひとつは ἐγήρᾱ (H148, ξ67)「年を取った」という ē 階梯、ひとつは φῦ (Z253, Z406), 複3 ἔφῡν (ε481)「生まれた、生じた」や δῦ (Φ118), ἐδῦ (X94, Ψ154), 双3 ἐδύτην (Z19)「～の中に入った、(天体が)死んだ」といった一貫した ø 階梯、最後は οὖτα (Z64), 不定法 οὐτάμεναι (Aeol.) (Φ68), 中動分詞複 οὐτάμενοι (Λ659)「傷つけた、打った」や ἐπι-πλώς (Z291) [分詞]「～の上を航行する、渡って行く」といったわけのわからない o 階梯であっ

た。このうち、最後のものに関しては、解決の糸口はまったくつかめない。前者に関しては、語源もまったくわからないので何とも言いようがないが、印欧祖語の語根アオリストが o 階梯をとった証拠は何ひとつないので、ラリンガルを含んだ二音節語基すなわち *H_3éutH_2-t(??) とでもすべきであろうか。ἐπι-πλώς (Z291) も英語の flood と関係づけるならば、IE *pléH$_3$-nt-s という形が出てくる。二番目のグループの φῦ (Z253, Z406) はヴェーダ語でも ábhūt, bhū́t と ø 階梯であり、IE *(é-)b^{h}úH$_x$-t と再建でき、印欧祖語の時代からのものと考えてまず間違いない。δῦ (Φ118) 以下も同様であろう。したがって、本節で最も問題となるのは ἐγήρᾱ (H148, ξ67) である。

ところで前節まで述べてきた mobile type 以外に、かなり少数グループではあるが、印欧祖語の非幹母音型屈折のもうひとつのアプラウトパターンで static inflection と呼ばれるものがあった。これは、その名のとおり、アクセントは常に固定しており、しかも語根は常に充実階梯であり、その中で強語幹・弱語幹間のアプラウトを行うという特殊なパターンである。印欧祖語にその存在が推定されうるものとしては、次のようなものがある:

＜動詞＞

α) mi- 動詞(語根動詞)

①　　IE

[能]現在単1	*stéu-m-i	>	G.Av. stǎ̊mi「ほめたたえる」
3	*stéu-t-i	>	Ved. stáuti
分詞	*stéw-n̥t-s	>	G.Av. stavas (Y.34.6, 50.4, 9)
未過単3	*stéu-t	>	Ved. staut
[中]現在単3	*stéw-o-i	>	Ved. stáve
	~ stéu-to-i > Gk.(Hom.) στεῦται「～しようという意思を表示する、断言する、約束する」(Γ83, I241, ρ525)		
未過単3	*stéu-to > Gk.(Hom.) στεῦτο (B597, Σ191, Φ455, Λ584), Av. staota		

②　　IE

[能]現在単3	*tḗk̑þ-t-i	>	Ved. táṣṭi
複3	*tḗk̑þ-n̥t-i	>	Ved. tákṣati
未過単3	*tḗk̑þ-t	>	G.Av. tāšt「形づくる」

(Gk. τέκτων (Δ110)「木工を職とするもの(大工・指物師など)」< IE téḱþ-ōn = Skt. tákṣā, f. τέκταινα < IE *téḱþ-n-iH₂)

※ Beekes(1988, 165頁)と Beekes(1995, 244頁)、Oettinger(1979, 219頁)による。①②ともに。

③

	IE		Hitt.
[能]現在単3	*wéḱ-t-i	>	wēkzi「望む、願う」
複3	*wéḱ-n̥t-i	>	wekkanzi
分詞	*wéḱ-n̥t-s	>	wekkanza /wékants/
未過単1	*wéḱ-m̥	>	wēkun /wégun/

(Gk. ἑκών「進んで、自由に、悦んで」< IE *wéḱ-ōn, (ϝ)ἑκά-(ϝ)εργος (A479, E439)「'Απόλλων の形容詞、思うがままに射る」< IE *wéḱ-n̥t [中性分詞](Rix: 1976, 144頁)、Skt. váṣṭi, 複3 uśánti「望む」, G.Av. vasmi, 双1 usvahi「望む」< IE *wéḱ-m-i, *uḱ-wés-i)

④「風が吹く」[受]「風に打たれる」

	IE		Hom.Gk.	Ved.
[能]現在単3	*H₂wéH₁-t-i	>	ἄ(ϝ)ησι (Hes.*Op*.516)	vā́ti
双3	*H₂wéH₁-tom	>	ἄ(ϝ)ητον (I5)	vā́tas
複3	*H₂wéH₁-nt-i	>	ἄ(ϝ)εισι (Hes.*Th*.875)	vā́nti
分詞	*H₂wéH₁-n̥t-s	>	複属 ἄ(ϝ)έντων (ε478)	vānt-(AV)
未過単3	*H₂wéH₁-t	>	ἄ(ϝ)η (ε478, μ325)	ávāt (AV)
[中]現在単3	*H₂wéH₁-to-i	>	ἄ(ϝ)ηται (Pi.I.*4*(3).9)	
未過単3	*H₂wéH₁-to	>	ἄ(ϝ)ητο (Φ386, *h.Cer*.276)	

※ 分詞 *H₂wéH₁-n̥t-s → *H₂weH₁-n̥t-ó-s > G.Av. /vaʔata-/, Lat. ventus, Goth. winds, E wind「風」

*-y- による拡張形

Hitt. 現在単3 ḫuwāi < IE *H₂wóH₁-y-e-i [完了] R(ó)-D(e)

複3 ḫūyanzi < IE *H₂uH₁-y-ént-i R(ø)-D(é)

Lith. véjas「風」< IE *H₂wéH₁-y-o-s

その他 Germ. vehen, Goth. waían, 完了複3 waíwōun < IE *H₂we-H₂wóH₁-

⑤「向きを変える」

	IE		OHitt.
[能]現在単3	*wḗH_2-t-i	>	wēḫzi[(6)]
複1	*wéH_2-wen-i	>	waḫḫ weni
過去単1	*wḗH_2-m̥	>	wēḫun

※ Oettinger(1979, 93頁)による。

β) 完了(Hitt. ḫi- 動詞)

①「強く蹴る」

	IE		Hitt.
[能]現在単1	*spórrH_1-H_2e-i	>	išpārḫi
3	*spórrH_1-e-i	>	išpāri
複3	*spérrH_1-n̥t-i	>	išparranzi[(7)]
命令複2	*spérrH_1-ten	>	išperten

※ *H_1 については Lat. spernō, ere, 完了 sprēvī, スピーヌム sprētum「遠ざける、拒絶する、軽蔑する」< IE *spér-n-H_1-o-H_2, スピーヌム *spréH_1-tu-m を参照。

②「むさぼる」

	IE		Hitt.
[能]現在単3	*g^{h}rób^h-e-i	>	k(a)rāpi /krā́bi/
複3	*g^{h}réb^h-n̥t-i	>	k(a)ripanzi

③「知っている」

	IE		Hitt.
[能]現在単1	*sók-H_2e-i	>	šākḫi
3	*sók-e-i	>	šākki /sā́ki/
複2	*sék-ten-i	>	šekteni
命令単3	*sók-u	>	šākku /sā́ku/
複2	*sék-ten	>	šekten

(Lat. sciō「知っている」)

※ ①②は Melchert(1994, 80～81頁)による。

<名詞>

α) r/n- 語幹(中性)

①「水」

	IE	Hitt.
単主/対	*wód-r̥	> wātar /wā́dar/ : OE wæter > E water, Lith. vanduõ
属	*wéd-n̥-s	> witenaš

(Sk. unátti「濡らす」< IE *u-n-éd-t-i, Lat. unda「波、海」, E wet < OE wæt < IE *wēd-ó-s, Gk. ὕδωρ, 属 ὕδατος「水」< IE *wéd-ōr, *ud-n̥-t-ós)

②「肝臓」

	IE	Gk.	Lat.	Ved.
単主/対	*yék^{w}-r̥	ἧπαρ (Λ579)	iecur	yákr̥-t, = Av. yākarə
属	*yék^{w}-n̥-s	ἥπατος	iecinoris	yakṇás

※ 斜格幹は Lith. jẽknos (f.pl.) に。

③「血」

	IE	Pal.	Hitt.	Ved.
単主/対	*ésH$_2$-r̥	ēšhur	ešḫar	ásr̥k
属	*ésH$_2$-n̥-s	ēšḫana[ ]	ēšḫanaš	asnás
複主/対	*ésH$_2$-ōr	ēšḫa		
属	*sH$_2$-n-ós		išḫan-ta (具格)	

β) s- 語幹(中性)

①「雲」

	IE	p.Anat.
単主/対	*néb^{h}-s	→ *nébes > HLuw. tipaš
位	*néb^{h}-s-i	→ *nébes- > CLuw. tappaš /tábbas/[8], Hitt. nēpiš /nébis/

※ 標準形 IE *néb^{h}-os 属 *néb^{h}-es-os > Gk. νέφος, νέφεος, Skt. nábhas, nábhasas, OCS nebo, nebese, Russ. нéбо, небесá, Lith. 複属 debes-ū̃ (旧子音幹で単数主格は debesìs)。

②「座席」

	IE	
単主/対	*sḗd-s	: OIr. síd「平和、塚」
位	*séd-s-i	: Welsh hed

※ 標準形 IE *séd-os, 属 *séd-es-os > Gk. ἕδος (Ψ205, ν344), ἕδεος「腰かけ、椅子、座、住居」

③ IE Gk.

単主/対 *ǵér-H̥₂-s > γῆρας (Y623), 属 γήραος (X60)「老年、高齢」

位 *ǵér-H̥₂-s-i > γέρας (A118, A153, Ψ9), 複 γέρα (B237)「名誉の贈り物、褒美、賞品」

(Gk. γέρων (A33)「老人」, Skt. járant- < IE *ǵérH₂-ōn, *-ont-m̥, Lat. grānum「(穀)粒」< IE *ǵrH₂-nó·m = E corn)

※ ①②は Melchert(1994, 116頁)による。

γ) t- 語幹

①「夜」(f.)

IE

単主 *nóg^{w}-t-s > Lat. nox, Gk. νύξ, Ved. nák, Goth. nahts, OE neaht > E night

属 *nég^{w}-t-s > Hitt. nekuz

※ 動詞形: Hitt. nekuzzi「夜になる」< IE *nég^{w}-t-i [mi- 動詞(語根現在)]

以上の諸例(動詞8例、名詞7例、計15例)をアプラウトパターンに従って分類すると、次の二つのパターンに分けることができる:

A型 : 強語幹 $C_1éC_2$-D

弱語幹 $C_1éC_2$-D

動詞 : mi- 動詞

名詞 : r/n- 語幹(中性)、中性 s- 語幹

B型 : 強語幹 $C_1óC_2$-D

弱語幹 $C_1éC_2$-D

動詞 : 完了

名詞 : r/n- 語幹(中性)、有生類 t- 語幹

動詞に関しては、結果はくっきりと分かれた。完了が強語幹に o 母音を持つB型をとるのは、完了が本来は「過去に遂行された行為の結果としての状態相」を意味するいわば静態であり、その点において基本としては o 母音を持つ名詞と軌を一にするからである。

これに対して、mi- 動詞は本来の動詞すなわち動態だから、e 母音を持つA型をとった。名詞では、r/n- 語幹は両方にまたがるが、中性 s- 語幹が必ずA型であるのは興味深い。ちなみに、中性 s- 語幹の標準形は $C_1éC_2$-os 、単数主対格以外 $C_1éC_2$-es-D 、複数主対格特殊形 $C_1éC_2$-ōs と常に e 階梯をとった(β)①②を参照のこと; $C_1éC_2$-ōs はインド・イラン語派に保存されている; 例えば *mén-os「心」> Gk. μένος「力、活力、激怒」, Lith. mēnas「芸術」に対する *mén-ōs > G.Av. manāh, Skt. mánāṁsi)。

かかる事情に鑑みるに、本節にて問題になっている語根アオリスト形 ἐγήρα (H148, ξ67)「年を取った」は、元来は static inflection あったに相違なく、e 母音をとっているので、これは間違いなくA型であった。また、A型であったと仮定すると mi- 動詞と軌を一にすることとなるが、これは同じ動態だからである。なお傍証として、この語の名詞形である s- 語幹の中性名詞が、<名詞> β)③にあげているように、語根アオリストと同じく強語幹 ē という static inflection を行ったらしいことは、非常に力強い裏づけとなっている。

もっとも、ἐγήρᾱ (H148, ξ67) 以外にも γέγωνε (ε400)「聞こえるように叫ぶ、大声で叫ぶ、呼びかける」< IE *ĝe-ĝónH$_3$-e; εἴωθα, 分詞 εἰωθώς (Z508)「習慣である、常である」< IE *swe-swód^h-H$_2$e といったごく少数の語根に長母音を持つ例外的な完了形も static inflection であった可能性がある。現にガーサー・アヴェスタ語には、複数形においても充実階梯(おそらく o 階梯、口蓋化が見られないので)を持つところの、複数3 cikaitrš「思う」< IE *ke-kóit-r̥-s なる形があり(Beekes: 1988, 186～187頁)、完了特有のもうひとつの static inflection のパターンの存在の可能性を示唆している。これをC型とすると、C型は次のように図式化できる:

C型 :	強語幹 C_1e-C_1óC$_2$-D(e)	Gk. γέγωνε (ε400)
	弱語幹 C_1e-C_1óC$_2$-D(e/o/ø)	G.Av. cikaitrš
動詞 : 完了		

なおガーサー・アヴェスタ語が、語尾が明らかに ø 階梯を示す -rš < IE *-r̥-s なる形を持っていることは、この形の語根上のアクセントを強く示唆している。Lat. -ēre や Hitt. -er より想定される IE *-ér は、おそらく ø 階梯の語根を持つ mobile type の語尾だったのだろう(Beekes: 1995, 238頁)。すなわち、IE *me-mn-ér(-i)「彼らは覚えている」(> Lat. meminēre), *wid-ér(-i)「彼らは知っている」のようにである。

これまでの考察を総合すると、ホメーロス・ギリシア語における語根アオリストの特殊形は、次の三つのパターンにまとめあげることができるだろう:

α) static inflection

強語幹 (é-)C_1éC_2-D(ø)　　ἐγήρᾱ (H148, ξ67) < IE *é-ĝērḫ$_2$-t

弱語幹 (é-)C_1éC_2-D　　ἐπι-πλώς (Z291) < IE *pléH$_3$-nt-s

β) 印欧祖語での一貫した ø 階梯

①[能]直単3	δῦ (Z253, Z406)	< IE *(é-)b^{h}úH$_x$-t = Ved. bhū́t, ábhūt
複3	ἔφῦν (c481)	< IE *ébh^{h}uH$_x$-nt ≒ Ved. ábhūvan
希単3	φῦη (theoc.15.94)	< IE *b^{h}uH$_x$-yéH$_1$-t = Ved. bhūyāt(AV)
分詞女	φοῦσα (Boeot.) (Corinn.21)	< IE *b^{h}úH$_x$-nt-iH$_2$
複男	φύντες (υ268)	< IE *b^{h}úH$_x$-nt-es
②[能]直単3	δῦ (F118)	< IE *dúH$_x$-t
	ἔδῦ (X94, Y154)	< IE *é-duH$_x$-t
双3	ἐδύτην (Z19)	< IE *é-duH$_x$-teH$_2$m
希単3	δύη (υ286)	< IE *duH$_x$-yéH$_1$-t
不定法	δύμεναι (Aeol.) (Z185, Z411)	< IE *duH$_x$-m-én

γ) まったく説明のつかないもの

οὖτα (Z64), 不定法 οὐτάμεναι (Aeol.) (Φ68), [中]分詞複男 οὐτάμενοι (Λ659)

このうち ἐπι-πλώς (Z291) は、本節の冒頭では οὖτα と同じ型にしておいてが、分詞形であるにもかかわらず充実階梯をとっていることに鑑みてα)型に所属させた。β)はおそらく印欧祖語内部の、しかも最末期の改新であろう。印欧祖語の最末期には、種々のデータより察するに、アプラウトの大原則が崩壊に向かっていたのはまず間違いないのである。最後に、ἔκτα (Z205, M46) は複数形(複1 ἀπ-έκταμεν (ψ121) < IE *é-kþṇ-me(n))や中動態(中単3 ἀπ-έκτατο (O437, P472) < IE *é-kþṇ-to)からの類推であり、本来の ø 階梯ではないことを申し添えておきたい。

以上で、現時点において私によって収集されているかぎりのホメーロス・ギリシア語の語根アオリストの、印欧語理論による解析を終える。次章では、これまでの解析の全体のまとめを行いたい。

Ⅳ. 総まとめ

まず第一に言えるのは、ホメーロス・ギリシア語における語根アオリストというのは、他の印欧語すなわち語根アオリストの残ったアナトリア語派(なかんずく、ヒッタイト語)とインド・イラン語派(ヴェーダ語、アヴェスタ語、古代ペルシア語)に同じく、ほとんどが mobile type だということである。つまり、能動単数で (é-)C_1éC_2-D(ø) 、双・単数と中動で (é-)C_1C_2-D(é/ó) をとり、命令法も基本的には同じだが、*-d^{h}i による単数2人称形は C_1C_2-d^{h}i をとり、また複数2人称は C_1C_2-té(-ne) の他に C_1C_2-d^{h}i なる e 階梯もとりえた。この e 階梯をとる命令法複数2人称は、ホメーロス・ギリシア語には κλῦτε (B56) なる痕跡が残るのみであるが(第3章 iii)節)、インド・イラン語派には如実に残っており、punāta「あなたがたは浄めよ」< IE *pu-n-éH_x-te, śr̥ṇótana「あなたがたは聞くのだ」< IE *k̑l̥-n-éu-te-ne といった n- 接中辞現在から、śróta「あなたがたは聞け」< IE *k̑léu-te = G.Av. srauta, gántana「あなたがたは行け」< IE *g^{w}ém-te-ne, sóta「あなたがたは押せ」< IE *séu-te といった問題の語根アオリストに至るまで(例は特に指定のないかぎり、すべてヴェーダ語)、すべての時制に共通して見られることで、ø 階梯しかとらない直説法形と対立している。この現象はヒッタイト語にも観察され、edmi「私は食べる」< IE *H_1éd-m-i (= Sk. ádmi) の複2 azzašteni /atsténi/ < IE *H_1d-té-n-i に対して命令法は ezten < IE *H_1éd-te-n であるし、同じく ḫarnikmi「私は破壊する」< IE *H_2r̥-n-éĝ-m-i に対して命令法は複2 ḫarnikten < IE *H_2r̥-n-éĝ-te-n の e 階梯、複3 ḫarninkandu < IE *H_2r̥-n-ĝ-ént-u (-ni- は e 階梯形からの複雑な類推; *H_2r̥-n-ĝ-ént-u > *H_2r̥-ne-n-ĝ-ént-u > /ḫarningántu/ であり、*enK > Hitt. inK[9] であった)の ø 階梯なる対立が見られる。したがって、これは印欧祖語のものであったと見て何ら差しつかえない(Oettinger: 1979, 141頁)。

さて、残りの二つの法であるが、希求法は、mobile type の場合は語根は常に ø 階梯をとり、法接尾辞のみが強語幹で e 階梯、弱語幹で ø 階梯をとった。すなわち、能動単数 C_1C_2-yéH_1-D(ø) : 双複数・中動 C_1C_2-iH_1-D(é/ó) である。接続法は、時制やアプラウトタイプとはまったく関係なく、非幹母音型活用の場合は常に C_1éC_2-e/o-D なる形をとった。このことは接続法というのが本来は独立した一形態であったことを物語っている(Beekes: 1995, 246頁)。ただ、ギリシア語においてはこの両法の残りが悪く、まだホメーロス・ギリシア語においては、希求法は本来の姿を比較的保っているものの接続法は語根に関して直説法形の階梯で均しており、語根と語尾との間に短い -ε/o- < IE *ē/ō をはさんで造るというやり方が残っているにすぎない。しかし、この -ε/o- も、後代のアッティカ

方言ではすべて幹母音型活用の接続法に由来する -η/ω- < *-ē/ō- < *-e-e-/-o-o- に置き換えられ、ここに非幹母音型活用の印欧祖語伝来の接続法はギリシア語の歴史において完全に消滅したのである(第3章 iii)節)。

この mobile type のアプラウトは、動詞・名詞にかかわらず印欧祖語の非幹母音型屈折においてはたいへん重要な役割を演じており、数的にも圧倒的に優勢であったが、実は印欧祖語にはもうひとつのアプラウトタイプがあった。これが static inflectionである。

これは、本稿において最も重要な論点であり、第3章の iv)節で、動詞8例、名詞7例の、ヒッタイト語とインド・イラン語派(ヴェーダ語、アヴェスタ語)とホメーロス・ギリシア語を中心データとした15例をあげ、ながながと解説したが、これらによって、ἐγήρᾱ (H148, ξ67)「年を取った」と ἐπι-πλώς (Z291)「〜の上を航行して」がこの static inflection のホメーロス・ギリシア語における唯二の残存形であり、語根アオリストにも印欧祖語において static inflection のものがあった可能性を明らかにした。そしてさらに、今まで知られていた強語幹 ø 階梯 : 弱語幹 e 階梯の二つの static inflection のアプラウトパターン以外にも、実は完了特有の第三のパターンとして強語幹 ō 階梯 : 弱語幹 o 階梯が印欧祖語に存在したらしいことを示した。しかもこれら三つのパターンが、動詞では動態(mi- 動詞、アオリスト)と静態(完了)というアスペクト的対立によって分かれ(すなわち、ē : e は動態、o : e と ō : o は静態という具合であった)、名詞では語幹によって分かれていたということが明らかになった(本稿第3章 iv)節)。

また、中動態しか持たない動詞すなわち media tantum は mi- 動詞のみならず語根アオリストにも見られるが、これらに関しては、全印欧語が一致して一貫して e 階梯を示すのが特色であり、一貫した ø 階梯を示す通常の非幹母音型中動態とは対立していることを第3章 ii)節で示した。ただ、στεῦται (Γ83, I241, ρ525)、未完了過去 στεῦτο (B597, Σ191, Φ455, λ584) (ep.)「〜しようという意志を表示する、断言する、約束する」のように、ギリシア語だけを見れば一見 media tantum のように見えるが、実は ē : e の static inflection の一部であった、ということも印欧語全体の観点からはありうるわけで、e 階梯を示す media tantum の非幹母音型活用自体が static inflection に所属すると規定したほうがいいのかもしれない(Beekes: 1995, 244頁)。

さて、これまで述べてきたことを総合して、直説法形にかぎって簡単な図式化を行うと、以下のようになる:

	mobile type	media tantum	static type
強語幹	(é-)C_1éC_2-D(ø)		(é-)C_1éC_2-D(ø)
弱語幹	(é-)C_1C_2-D(é/ó)	(é-)C_1éC_2-D(e/o)	(é-)C_1éC_2-D(e/o)

※ 強語幹とは、動詞にかぎっていえば、能動単数を指し，弱語幹とは双・複数ならびに中動を指す。

また、本稿で最大の論点となった static type は、強語幹 ： 弱語幹の語根のアプラウト階梯だけで示すと、次の3タイプに分類できる:

A. ē : e 動詞: mi- 動詞、語根アオリスト、s- アオリスト(10)(いずれも動態)
名詞: r/n 語幹(中性)、中性 s- 語幹

B. o : e 動詞: 完了(静態)
名詞: r/n 語幹(中性)、有生類 t- 語幹

C. ō : o 動詞: 完了(静態)

動詞がアスペクトによって分かれ、名詞が基本的に中性であり語幹によって分かれるというひとつの重要な結論を得ることができる。ただし、ギリシア語においては、いずれの型も痕跡を残すのみでパラダイムとしては残っておらず、B型は完全消滅した。A型はインド・イラン語派とヒッタイト語に、B型はもっぱらヒッタイト語に負っており、C型はホメーロス・ギリシア語とガーサー・アヴェスタ語との組み合わせによってのみ出てくるだけである。

いずれにせよ、語根アオリストというのは印欧語の中にあっても最も古体的な活用形態であって、ギリシア、インド・イラン、アナトリアというわずか三語派に残るのみであり、ホメーロス・ギリシア語においてはまだ健在ではあったものの明らかに衰退の方向に向かっており、アッティカ方言においては、ἔθηκα「置いた」、ἧκα「放った」、ἔστην「立った」、ἔβην「行った」、ἀπ-έδρᾰν「走り去った」、ἔγνων「知った」、ἔδῡν「沈んだ」、ἔφῡν「生まれた、生じた」といったすべてラリンガル終わりの語根による九形ばかりを残すのみとなって、ここに語根アオリストはギリシア語の歴史上において事実上消滅したのである。

＜本文注＞

(1) s- アオリストのパラダイムアプラウトを簡単に図式化すると、以下のようになる:

		IE
能動単数	(é-)C_1éC$_2$-D(ø)	*(é-)déiḱ-s-s (sg.2) > G.Av. dāiš「示した」
その他	(é-)C_1éC$_2$-D	*(é-)déiḱ-s-n̥t (pl.3) > Gk. ἔδειξαν

G.Av.		IE
dāršt「保った」	<	*d^{h}ér-s-t (sg.3)
mansta「考えた」	<	*mén-s-to (Msg.3)

母音の音色自体は Lat. vēxī, OCS vĕsŭ「運んだ」< IE *(é-)wéĝ^h-s-m̥, etc. に保存されている。

(2) これに関しては、単純 H_2- 語幹も同様であった。「女」を意味する語は、次のように曲用したと考えられる:

	IE			OIr. Ved.
単主	*g^{w}én-H$_2$	R(é)-S(ø)	>	ben : jáni-「妻」≒ Russ. жена́
複	*g^{w}n-éH$_2$-s	R(ø)-S(é)-D(ø)	>	mná = gnā́s-pati「神女」: Gk. γυνή, (Boeot.) βανά (Corinn.21)
双主/対	*g^{w}n-éH$_2$-iH$_1$	R(ø)-S(é)-D(ø)	>	mnaí

すなわち強格(単数主・呼・対・位格)では e 階梯語根を、弱格(その他)では ø 階梯語根をとり、アクセントが語根から接尾辞に動く proterokinetic type の曲用を行った。ただ現実には、印欧祖語の段階ですでに接尾辞部のみの交替となり、多くは接尾辞部も e 階梯で統一され、そこにアクセントが落ちた。

(3) この語根の再建形に、従来の *g^{wh}ð ではなく *d^{h}g^{wh} というひっくり返った、しかも閉鎖音しかない形を用いたのは、カーサー・アヴェスタ語の dājīṯ.arəta-/djit^{ʔ}arta-/「アルタ神を破壊する」< IE *d^{h}g^{wh}i-t- による(Beekes: 1995, 134頁)。

(4) C_1ReC$_2$- 型の語根によるアプラウト(独 Schwebeablaut)を指す。この手の語根は次のようなアプラウトを行った:

	IE		Lat.
C_1ReC$_2$-	*préḱ-es (pl.N)	R(é)-D(e)	> precēs「懇願、祈り」
C_1RoC$_2$-	*proḱ-ó-s [行為者名詞]		> procus「求婚者」
C_1R̥C$_2$-	*pr̥ḱ-sḱó-H$_2$		> pōscō「要求する」

= G.Av. prsā, Ved. pr̥cchā́-mi, Germ. forschen

(5) 例えばヒッタイト語の tarḫmi「私は征服する」< IE *térH₂-m-i 過去形 tar-aḫ-ta /tárḫt/「彼は征服した」< IE *térH₂-tはヴェーダ語のアオリスト形 átārīt < IE *é-terH̥₂-t に対応する(s- アオリストっぽく延長階梯でもって造り変えられている)が、これはヒッタイト語の過去形が印欧祖語のアオリストを継承しており、アオリスト的機能を担っていたことを意味している(Oettinger: 1979, 222頁)。

(6) ヒッタイト語をはじめとするアナトリア語派では、ラリンガルの前後の *ē 母音はその音色が維持された。例えば、「太陽」を意味する Gk. (Gret.) ὀβέλιος (Hsch), (Ion.) ἠ(ϝ)έλιος < p.Gk. *hāwelios ← IE *séH₂-wl̥, 属 *sH₂-wén-s (> G.Av. hvarə, xvəng) に対応する集合数形 IE *séH₂-wōl > Luw. šeḫwāl「鋭い」のように。すなわち IE *ēH₂ > p.Anat. *ēh であり、通常の変化 IE *eH₂ > p.Anat. *aH と対立している。

(7) ヒッタイト語では VRH₂V > VRRV なる変化が起こった。例えば、ḫuwalliš-「むしり取られるもの」< IE *H₂wélH₁-es であったが、ラリンガルの存在は Lith. vìlna, Skt. úrṇā-, Lat. lāna「羊毛」< IE *H₂wĺ̥H₁-n-eH₂ なる対応から察することができ(リトアニア語の鋭アクセントはラリンガルの存在を示唆している)、また Gk. λῆνος εος, τό「嘆願者のしるしとしてオリーブの枝に巻く羊毛の房」< IE *H₂wléH₁-n-os, -es-os よりそれが *H₁ であることをうかがい知る(Melchert: 1994, 79〜81頁)。

(8) p.Anat. D > Luw. DD/é_V (Čop の法則)。アナトリア祖語の有声閉鎖音はアクセントを持つ *e の後と母音の前で重複化した:

例: IE *méd^h-u「蜂蜜(酒)」> p.Anat. *médu「葡萄酒」> Luw. maddu = Gk. μέθυ (H471, η179, ν50, ξ194)「葡萄酒」, Ved. mádhu, Av. maδu-ca, OHG metu (> Germ. Met), OE meodu (> E mead), ORuss. meddo, Lith. medù-s, OCS medŭ, Celtiber. Medu-genus 以上「蜂蜜(酒)」。

IE *péd-un-os (= p.Anat.) > Luw. paddunaš「運ぶこと」

cog.Lat. pēs, 対 pedem「足」< IE *pḗd-s, *péd-m̥

Gk. πούς, 対 πόδα「足」< IE *pṓd-s, *pód-m̥

IE *b^hé-b^hr̥ĝ^h-w-eH₂ > p.Anat. *bébr̥ĝwaH- > Luw. papparkuwa-「浄める」

[畳音式強意動詞]

これは鼻音・流音にも通用した。

IE *mél-i-t- > p.Anat. *mélid- > Luw. mallit-inzi (pl.)「蜂蜜」= Gk. μέλι (Λ631, κ234), 属 μέλιτος (A249, Ψ170)「蜂蜜」, Lat. mel, 属 mellis, n.「蜂蜜」, Hitt. milit-, Pal［パラー語］m(a)lit-ānnaš「蜂蜜入りの」< IE *ml-i-t-éH$_2$-t-n-os

IE *d^{h}g^h-ém(-i)［位格］> p.Anat. *dgém(-i) → Luw. tiyammi-š「大地」= Hitt. tagān

	IE		Hitt.	Ved.
単主	*d^{h}ǵ^h-ōm	>	tēkan /tḗgan/ ≒ Gk. χθών < IE *dhǵh-ṓm	
属	*d^{h}ǵ^h-m-ós	>	taknāš /tagnás/	kṣmás, gmás, jmás
位	*d^{h}ǵ^h-ém(-i)	>	tagān /tagán/	kṣámi : Lith. žẽmė, Russ. земля́
				Toch.A tkaṃ 「大地」

(Melchert: 1994, 74～75頁)。

(9) この変化の印欧祖語にさかのぼる代表的な例としては、次のようなものがある:

IE *H$_1$léng^h-m̥ (sg.1)［語根動詞］> Hitt. linkun「誓った」

IE *H$_1$léngh-ōi-s R(é)-S(ō)-D(ø) > Hitt. lingāiš「誓い」

cog.Gk. ἔλεγχος「責められるべきこと、恥、恥辱、不名誉」, ἐλεγχής, 最上級 ἐλέγχιστος (対 -ον B285)「責められてしかるべき、恥ずべき」

(Melchert: 1994, 139頁)。

(10) ここに s- アオリストが所属することについては、一見説明がないように思われるかもしれないが、第3章に説明がある。また注(1)も参照のこと。

＜参考文献＞

Bammesberger, Alfred : 1986, *Der Aufbau des germanischen Verbalsystems,* Carl Winter-Universitätsverlag, (Heidelberg).

Beekes, Robert S. P. : 1988, *A Grammar of Gatha-Avestan,* E. J. Brill, (Leiden - New York - Køpenhavn - Køln).

: 1995, *Comparative Indo-European* Linguistics, John Benjamins Publishing Company, (Amsterdam/Philadelphia).

Capelle, Carl : 1968, *Vollständiges Wörterbuch über die Gedichte des Homeros und der Homeriden,* Wissenschaftliche Buchgesellschaft, (Darmstadt).

Chantraine, Pierre : 1958, *Grammaire Homérique,* Tom 1, Phonétique et Morphologie, Éditions Klincksieck, (Paris).

Evelyn-White, H. G. (ed.) : 1914, *Hesiod,* (= Loeb Classical Library 57), Harvard University Press, (Cambridge, Massachusetts) - William Heinemann Ltd., (London).

古川晴風(訳注) : 平成5(1993)、『嵐とパイエーケス人の国』、大学書林、(東京)。

Hude, Carl (ed.) : 1927 (3rd ed.), *Hērodotī Historiae* I, II, Oxford University Press.

Jasanoff, Jay H. : 1978, *Stative and Middle in Indo-European,* (= Innsbrucker Beiträge zur Sprachwissenschaft, Band 23), Institut für Sprachwissenschaft der Universität Innsbruck.

高津春繁 : 1960、『ギリシア語文法』、岩波書店、(東京)。

Liddell, Henry George & Scott, Robert : 1968, *Greek English Lexicon,* Oxford at the Clarendon Press.

Macdonell, Arthur Anthony : 1977 (復刻版、原本1910), *Vedic Grammar,* 名著普及会、(東京)。

Melchert, H. Craig : 1994, *Anatolian Historical Phonology,* (= Leiden Studies in Indo-European 3), Editions Rodopi B.V., (Amsterdam - Atlanta, GA).

Monro, David B. & Allen, Thomas W. (ed.) : 1920 (3rd ed.), *Homerī Opera* I Īliadis I-XII, II Īliadis XIII-XXIV, Oxford University Press.

Murry, A. T. (ed.) : 1919, *Homer the Odyssey* I, II, (= Loeb Classical Library 104, 105), Harvard University Press, (Cambridge, Massachusets), William Heinemann Ltd., (London).

Oettinger, Norbert : 1979, *Die Stammbildung des hethitischen Verbums,* (Erlanger Beiträge zur Sprach- und Kunstwissenschaft, Band 64), Verlag Hans Carl, (Nürnberg).

Page, D.L. (ed.) : 1968, *Lyrica Graeca Sēlēcta,* Oxford University Press.

Risch, Ernst : 1974, *Wortbildung der homerischen Sprache,* Walter de Gruyter, (Berlin - New York).

Rix, Helmut : 1976, *Historische Grammatik des griechischen,* Wissenschaftliche Buchgesellschaft, (Darmstadt).

Watkins, Calvert : 1969, *Indogermanische Grammatik,* Band III/I, Geschichte der indogermanischen Verbalflexion, Carl Winter - Universitätsverlag, (Heidelberg).

吉田育馬：平成4(1992)、『印欧祖語における名詞パラダイムのアプラウトタイプの生成と発展』、(筑波大学大学院文芸・言語研究科平成4年度修士論文)。

あとがき

前の論文を書いてから早くも3年が経とうとしている。この間にさまざまな人に書くことを勧められてはきたが、地道な古代語の研究においてなかなかデータも溜まらず、書くには至らなかった。かかる遅々たる研究状況において、最終的に決断を下したのは同僚の山田久就君の『言語学論叢』への投稿の勧めによってであり、折しもやっとのことでデータが溜まりひとつの結論に至ったので、今回の投稿になった運びである。その意味で山田久就君には感謝します。

平成8年(1996年)12月28日(土)

吹田市役所環境事業部事業第二課(大阪府吹田市寿町)にて

Examples of the Root Aorists in Homeric Greek and its Analysis in the light of Indo-European Morphological Theory

Ikuma YOSHIDA

The aim of this paper is to give sufficient examples of Homeric Root Aorists and analyse them in the light of Indo-European morphological theory. The Root Aorists in proto-Indo-European present the mobile type out of the Indo-European ablaut types. In recent years, however, it has been explicated by Johanna Narten and others that a few of the Root Presents show the static type.

Thus, the point at issue is the possibility of the fact that Root Aorists and Perfect, which show the static type, did exist in proto-Indo-European. I concluded that two Aorist forms and two Perfect forms in Homeric Greek are traces of the proto-Indo-European static type, which, in turn, can be classified into two subtypes according to the aspect of verbs.